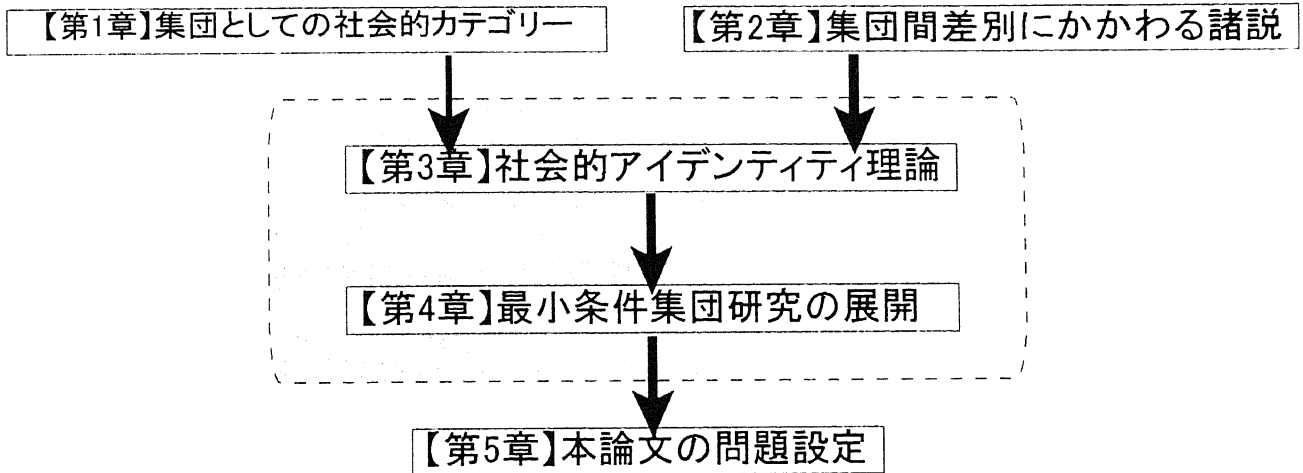


第 I 部 序 論



序論は、5章から構成される。第1章では、グループ・ダイナミクスを中心とする従来の集団研究が、対面的相互作用と相互依存性を軸とする小集団の集団像を保持していたこと、そして、集団間差別の検討において、小集団の概念では不十分であることを指摘する。第2章では、従来より集団間の差別や偏見を説明すると考えられてきた諸説を概観する。第3章では、集団間差別の説明原理として、本論文が依拠する社会的アイデンティティ理論について、詳細に論じる。第4章では、社会的アイデンティティ理論の実証的基礎をなす最小条件集団研究について概観し、従来の研究動向を議論する。第5章では、以上の議論をふまえ、本論文で検討される問題を提起する。

第1章 集団としての社会的カテゴリー

1.1 グループ・ダイナミクス研究における集団の定義

人類の主要な特徴の1つは、複数の個人がまとまり、集団(group)としてさまざまな活動を行っている点にある。集団の存在は、家庭・学校・職場、地域、政治のあらゆる場面で目にすることができる。また、所属集団の価値や規範は、成員の態度や行動パターンに多大な影響を及ぼす。そのため、集団を抜きにして、われわれの生活はどうてい成り立ちえない。集団の存在は、人間にとって不可避なものといえるだろう。

「集団」という語は、さまざまな人間の集合体に適用可能である。そのため、「集団とは何か?」という問いに対して正確に答えることは、たいへん難しい。集団の定義は、研究者の立場によって大きく異なる。しかし、研究者が最も重要と考える集団の特徴を整理すると、その定義にはいくつかの共通点が浮かび上がってくる。Table 1.1は、従来のグループ・ダイナミクスを中心とした社会心理学、および、社会学の主要なテキストから、集団の定義に関連する記述を抜粋したものである。これを見ると、主に(a)相互依存性、(b)相互作用、(c)構造的要因の3つの観点から、集団がとらえられていることがわかる。

相互依存性 多くの集団では、ある成員の行動や行動の結果は、他の成員の行動や結果と何らかのかかわりを持っている。相互依存性が集団の形成と機能にとって重要であることを最初に指摘したのは、Lewin(1948/1967)であった。Lewin(1948/1967)は、成員間の価値や信念の類似性を集団の定義に採用する立場に反対し、次のように述べている。

「夫婦とその子どもは、お互いを比べるとあまり似ていない。しかし、彼らは強固な自然の集団として存在する...2人の個人が同じ、あるいは、異なる

集団に属しているか否かを決定するのは、類似性—非類似性ではなく、社会的相互作用あるいは他の型の相互依存性である。集団は、類似性ではなく相互依存性に基づくダイナミックな総体として、最もよく定義される」(Lewin, 1948/1967, p.184)

相互依存性の語は、さまざまな意味合いで用いられるが、整理すると運命の

Table 1.1
The definition of group

Factor	Example
Interdependence	<p>It is not similarity or dissimilarity that decides whether two individuals belong to the same or to different group, but social interaction or other types of interdependence. A group is best defined as a dynamic whole based on interdependence rather than a similarity.</p> <p>...He(Jewish adolescent) will understand that regardless of whether the Jewish group is a racial, religious, national, or cultural one, the fact that it is classified by the majority as a distinct group is what counts. ... He will see that the main criterion of belongingness is interdependence of fate(Lewin, 1948/1967, p.184).</p> <p>A group is a collection of individuals who have relations to one another that make them interdependent to some significant degree. As so defined, the term group refers to a class of social entities having in common the property of interdependence among their constituent members(Cartwright & Zander, 1968, p.46).</p>
Interaction	<p>Therefore, for purposes of this book, a group is defined as two or more persons who are interacting with one another in such a manner that each person influences and is influenced by each other person(Shaw, 1981, p.8).</p> <p>We mean by a group a number of persons who communicate with one another often over a span of time, and who are few enough so that each person is able to communicate with all the others, not at secondhand, through other people, but face-to-face(Homans, 1950, p.1).</p>

相互依存性(interdependence of fate)と課題の相互依存性(interdependence of task)の2つを挙げることができる(Brown, 1988, 黒川他訳, 1993). 運命の相互依存性とは, 共通運命(common fate)とも呼ばれ, 複数の個人が同じ結果(利益であれ損失であれ)や経験を共有することを意味する. たとえば, ある災害の被災者があたかも1つの集団のように知覚されるのは, 「被災した」という彼らの共通運命による. Lewin(1948/1967)は, 社会的なマイノリティであるユダヤ人集団に関する考察の中から, 運命の相互依存性が集団の存在にとって重要な役割を果たしていることについて, 次のように記述している.

「ユダヤ人の青年は, ユダヤ人集団が人種的, 宗教的, 国家的, 文化的なものの中のいずれであるにせよ, ユダヤ人が[社会の]マジョリティから明確な集団として分類されているという事実が重要であることを悟るであろう...彼は集団所属の主要な基準が, 運命の相互依存性であるとわかるだろう」(Lewin, 1948/1967, p.184. カッコ内は筆者が加筆).

運命の相互依存性は, 相互依存の最も弱い形式である. より重要なのは, 目標達成や利益追求において, 集団成員が相互に関係することである(たとえば, ある成員の目標達成が, 他の成員の目標達成を促進する, など). こうした目標達成や利益追求における相互依存が, 課題の相互依存性である. 目標や利益の点で高度に相互依存した集団では, 集団の目標や利益が互いの成員間で共有されるようになる. そして, 複数の成員が, 目標追求のために一緒に活動に従事することも見られる. Lewin(1948/1967)が運命の相互依存性に限定したのは異なり, Cartwright & Zander(1968)をはじめとする多くの研究者が, 一致した目標や利益の追求も含めた幅広い観点から相互依存性をとらえ, 集団を定義している.

相互作用 相互作用は相互依存性の一形式である. 従って, 相互依存性による定義は, 相互作用によるものと本質的に何ら変わりがない場合も多い. たと

例えば,Shaw(1981)によると,

「この本の目的からすれば,集団は互いに影響を与え,かつ,影響を受け合うように相互作用する2人以上の人々と定義される」(Shaw, 1981, p. 8)

さらに,相互作用の観点から集団を定義した研究者として,Bales(1950)とHomans(1950)は,次のように述べている.

「小集団は,単独の,あるいは,一連の対面的出会いの中で互いに相互作用し合う数人の人物として定義される. 相互作用によって,各々の成員は十分に区別された他者の印象あるいは知覚を受け取る. その結果,成員は相互作用の時点あるいは後に尋ねられたときに,(単にいたことを思い出すだけのこともあるが)他の成員に対し1人の人間として反応を返すことができる」(Bales, 1950, p.33).

「集団の語は,ある期間にわたって互いにコミュニケーションし合う数人,あるいは,間接的ではなく対面的にすべての他者と互いにコミュニケーションをとることができる程度の数の人々を意味する」(Homans, 1950, p.1).

Bales(1950)もHomans(1950)も,ともに相互作用の対面性(face-to-face)・直接性を強調している. しかし,特定の相互作用の型によって,集団の定義が限定されるものではない. たとえば,コンピュータ・ネットワーク上のニュース・グループに代表されるように,言語的相互作用を中心とし,かつ,非対面的で間接的な相互作用に基づく集団も見られるのである.

構造的要因 一般に,社会学的研究では,構造的要因の観点から集団を定義する. なぜなら,それらの研究では,集団成員間の相互作用ではなく集団全体が分析の単位となるからである. Sherif(1967)は,サマー・キャンプに参加した少年たちの集団形成過程を検討し,集団の発達に応じて見られる地位や役割や規範の存在を強調した. すなわち,Sherif(1967)によると,

「集団を次のように定義する. 数人の個人からなる社会的単位であ

り、(a)一定の期間互いに役割および地位関係を持ち、(b)少なくとも重要な事柄について、個人の態度および行動を規制する一群の価値あるいは規範を有するものである」(Sherif, 1967, p.12)

しかし、構造的要因に基づく集団の定義は、それが単に集団の一側面を記述したにすぎないのではないか、という批判を受けることがある。

これらの要因をもとに、Deutsch(1973)は、「擬似集団(quasi-group)」「機能する集団(functioning group)」「組織化された集団(organized group)」の3つに集団を分類した(Table 1.2)。

擬似集団は、(a)複数の個人の間にある共通の特徴が見られ、(b)1つのまとまり(集団の実体性, Campbell, 1958)として知覚され、さらに(c)目標や利益の点で各々の成員が相互依存性を意識している集団である。機能する集団は、擬似集団の特徴に加え、実際に(d)成員間の相互作用がなされ、(e)相互依存した目標を追求する集団である。最後に、組織化された集団は、相互作用・相互依存に加えて、集団内に一連の(f)規範と(g)役割が形成されている集団である。

このうち、従来のグループ・ダイナミクスの伝統の中で研究対象とされてきた「小集団」(small group)とは、「機能する集団」と「組織化された集団」にあたる。集団凝集性、集団内の社会的影響過程、リーダーシップ過程などグループ・ダイナミクスの主要な問題は、一見するとわかるように、すべて集団内の相互作用や役割・地位関係と密接に関連する。なかでも、相互依存性と相互作用の2つは、集団の特徴として特に重視されていたと思われる。

Table 1.2
Key concept of definition of 'group'

Criteria	Representative Study	Classification by Deutsch(1973)
(a) Having one or more characteristics in common	Tajfel & Turner(1979)	Quasi-group
(b) Perceiving themselves as forming a distinguishable entity	Campbell(1958)	
(c) Being aware of the positive interdependence of some of their goals or interests	Lewin(1948/1967)	Functioning Group
(d) Interaction with one another	Bales(1950) Homans(1950)	
(e) Pursue their promotively interdependent goals Together	Campbell(1965)	Organized Group
(f) A set of norms that regulate and guide member interaction		
(g) A set of roles, each of which has specific activities, obligations, and rights	Sherif & Sherif(1969)	

これに対し、残された「擬似集団」は、その命名からもわかるように不完全な集団とみなされてきた。Deutsch(1973)は、「集団は、ある共通特徴によって一緒に分類される人々からなる集合、類、カテゴリー、タイプなどと区別されるべきである」(Deutsch, 1973, p. 48)として、通常の集団とは明確に区別した。「擬似集団」

第1章 集団としての社会的カテゴリー

1.1 グループダイナミクス研究における集団の定義

の例として、われわれは民族や言語や宗教などの点で区分される大規模な社会的カテゴリー(social category)を挙げることができる。そのような社会的カテゴリーでは、成員間の緊密な相互作用・相互依存関係は想定しがたい。そのため、集団内相互作用や相互依存性を重視するグループ・ダイナミクスの研究者は、民族集団・宗教集団などの「集団」を「疑似集団」として関心の範囲外においてきたのである。

1.2 小集団から社会的カテゴリーへ

従来のグループ・ダイナミクスによる小集団研究は、集団内相互作用の分析で数多くの成果をあげてきた(Cartwright & Zander, 1969; Shaw, 1981)。しかし、相互作用および相互依存性の観点からすべての集団現象を分析し、小集団の集団像をすべての集団研究で適用するには、いくつかの問題点が指摘される(Brown, 1988, 黒川他訳, 1993; Hogg, 1992, 廣田・藤澤監訳, 1995)。

第1に、従来のグループ・ダイナミクス研究では、「小集団」と「大規模な社会的カテゴリー」を明確に区別し、「小集団」こそが分析するに値する集団と考えてきた。しかしながら、小集団と同じように、大規模な社会的カテゴリーもまた、われわれの行動や態度に確実に影響を及ぼす。たとえば、われわれの態度や行動は、生まれ育った地域や自身の民族性が有する文化および規範から、影響を強く受けている。また、集団間の差別や偏見といった集団間関係の問題は、小集団だけでなく大規模な社会的カテゴリーでも共通に見られる。これらの社会的カテゴリーは、大規模であるがゆえ、すべての成員が互いに相互作用し合うのが不可能であるし、集団全体で相互依存関係を形成することもできない。したがって、相互作用や相互依存とは別に、集団成員の態度や行動を方向づける過程が存在することが示唆される。実際、「小集団」と「大規模な社会的カテゴリー」を区別する客観的基準が何であるかは、あまり明確ではない。すなわち、小集団とみなすことができる集団成員数の範囲は、研究者によって異なり、一致した見解が得られていないのである。以上より、少なくとも特定の集団現象においては、小集団と社会的カテゴリーを区別するのではなく、両者に共通する心理過程を検討する必要があると思われる。そして、集団サイズや相互作用および相互依存性に依存しない形で「集団」を定義し、集団の問題が議論されなければならないと思われる。

第2に、より根本的な問題として、伝統的な小集団研究では、2人集団が集団のプロトタイプとして扱われていた。このことは、観察されるすべての集団の92%までが2人あるいは3人の集団であるという、James(1951)の古典的な調査によって正当化されてきた。その結果、グループ・ダイナミクス研究は、事実上個人内要因や対人相互作用の観点から集団の現象を説明する試みとなってしまった。Hogg(1992, 廣田・藤澤監訳, 1995)やHogg & Abrams(1988, 吉森・野村訳, 1995)によると、集団現象もまた個人内要因と対人過程に還元して説明できるという考えが、(アメリカ合衆国を中心とする)多くの社会心理学研究で前提とされてきたという。確かに「真に実在するのは、個人のみである。集団や制度は、各個人の心の中で反復される理念、思想、集団のまとまりであって、個々人の心の中に存在するだけである」(Allport, 1924) こうした「集団心」(group mind, McDougall, 1920)批判の主張に見られるように、集団そのものは実在しない。したがって、集団を構成する個々人の意識を離れて、何らかの心理的実体を仮定することは不可能である。しかし、それは、集団現象を対人過程の集合に還元して理論化しなくてはならないことを意味しない。集団は単なる個人間の結びつきとは異なるユニークな特性を持つ。そして、集団過程は単なる対人過程の総和であると言い切ることができないような特質を持つのである。

従来 of 個人主義的な社会心理学に対する批判は、1970年代よりヨーロッパを中心に展開されている(Hogg & Abrams, 1988, 吉森・野村訳, 1995)。われわれの一人一人は、パーソナリティなどの点で、さまざまな共通性や差異性を示す多様な存在である。結果的に、われわれが形成する対人関係は高度に複雑なものである。にもかかわらず、人々が集団状況におかれたとき、個人間の類似性や差異性は無視される。その一方で、われわれは集団の成員として他の成員と同じようにふるまい、共通の特徴を持つ人々と知覚されるようになる。大規模な社会的カテゴリーは目標志向的でないため、成員間の差異はとりわけ大きいと

考えられるが、それでもやはり集団内の斉一性が高まるのである。このように、集団状況では一般に成員間の同質性や斉一性が強調されるという大きな特徴を持っている。このことは、集団それ自体にかかわる心理過程が、対人過程は質的に異なる1つの研究対象として取り上げられる正当な理由がであると思われる (Brown, 1988, 黒川他訳, 1993)。

集団の社会心理学においていま必要なのは、小集団も社会的カテゴリーも、ともに同じ心理学的機能を有する「集団」として再概念化することである。そして、対人過程の外延ではなく、むしろ明確に区別されるものとして集団過程を理解する集団現象の理論の発展が望まれる。本論文の理論的基礎をなす社会的アイデンティティ理論 (social identity theory) は、まさしくこれらの小集団研究に対する批判・不満について、1つの回答を示したものである (Tajfel, 1978, 1982; Tajfel & Turner, 1979, 1986)。社会的アイデンティティ理論において中心となる概念は、相互作用ではなく「ある集団に所属する」という個人の自己同一性—すなわち、アイデンティティ—の意識である。この「集団の一員である」というアイデンティティの感覚は、社会的カテゴリーと小集団の違いにかかわらず、同じ心理過程を経て提供される。その結果、両者を等しい心理学的存在として理論化することができる。さらに、集団のレベルから自己および他者を認識し定義することは、集団に属する成員は各々が等価で交換可能な存在であるという知覚をもたらす。その結果、集団状況では人々の態度や行動が同質性を帯びる。そして、集団過程は、個人内特性や対人関係の過程から独立したものとして概念化される。当初は集団間関係の分析から出発した社会的アイデンティティ理論は、その基本的考えをもとに集団内過程の分析にまで拡張され (自己カテゴリー化理論, self-categorization theory)、さまざまな集団過程の統一的な解釈を提供している (Oakes, Haslam, & Turner, 1994; Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell, 1987; Turner & Oakes, 1989)。

第1章 集団としての社会的カテゴリー

1.2 小集団から社会的カテゴリーへ

次章では、集団間差別の研究を概観することにより、まず最初に、大規模な社会的カテゴリーか小集団かの違いにかかわらず、一般に人が内集団(自分が所属すると考えている集団)の他者をひいきし、外集団(所属しない集団)の成員を差別することを示す。これにより、社会的カテゴリーが小集団と同じように「集団」として機能することを確認する。続いて、従来の集団間行動の理論である権威主義パーソナリティ理論・欲求不満攻撃理論・信念適合性理論・目標集団葛藤理論の4つについて議論する。そして、これらの理論が、個人内要因や対人過程に基づく理論であり、それゆえに集団間差別の現象を十分に説明しえないことを明らかにする。